

縞柄のイメージについて

大妻女子大家政 吉岡 徹

目的 衣服のデザインにおいては、体型を細く高くあるいは脚を長く見せる等いろいろな試みが行われている。それは被服の審美性を高める上で重要な意味をもつ。幾何学図形において、同形同大(四角形)の縦縞と横縞は、前者は横長に見え、後者は縦長に見えるという。このような幾何学的図形は錯視現象に大きくかかわり、そのは、被服の図柄においては、着用したとき、その「見え」イメージに影響を与える。今回、電子シャッター式タキストスコープを用いて、縞柄の太さ・色・方向の変化について検討した。

方法 サンプルは、黒・赤・青・緑の4色の「太縞」「細縞」の2種類の太さによる縦、横の計16種類の35mmカラーライドである。これらの刺激を用いて、1 msecより30 msecまで、10種類の露出時間による考察を行った。

結果 露出時間が最も短い1 msecの段階で、太さと方向に関する判断は、ほとんど正答で、露出時間の増大に伴う判断の変化はほとんど認められなかった。また、色についての判断のみが露出時間に伴って改善されたが、刺激の色によって判断に差がみられた。すなわち、黒と赤は露出時間が最も短い1 msecの段階から正答率が高く、したがって露出時間の増大に伴う判断の変化はほとんど認められなかった。それに対して、青と緑は短い露出時間では誤答数が多く、露出時間の増大に伴って誤答が顕著に減少した。そして、露出時間15 msecから4つの色の間で判断の成績に差異がなくなった。